

MIE UNIVERSITY NEWSLETTER

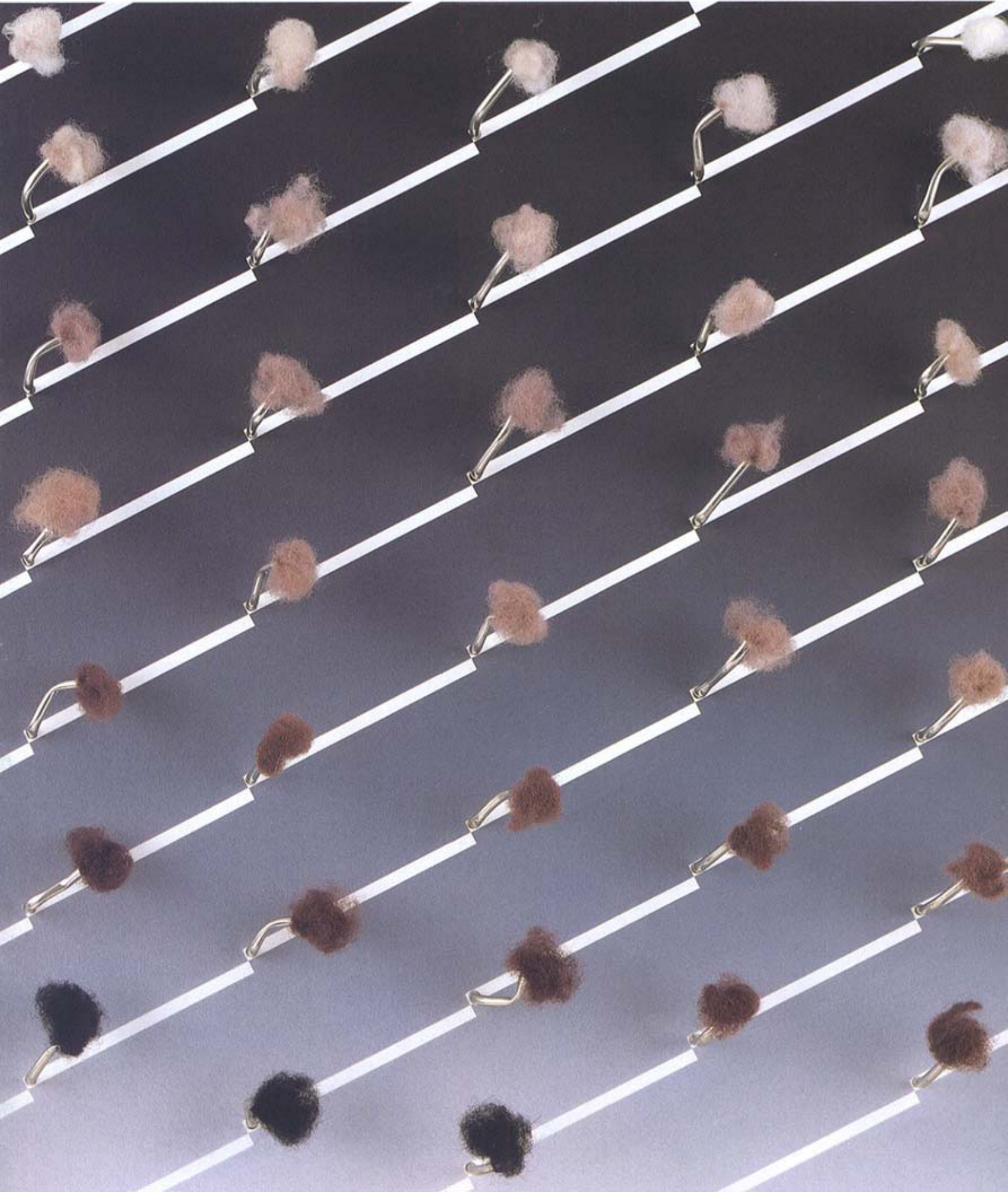
ウェーブ三重大

1995. 12. 28

6号



三重大学広報委員会



表紙タイトル 『 新 生 』



表紙デザイナープロフィール

宮田 修平

教育学部教授（芸術学士）

1933年生

Profile of cover designer

Syuhei MIYATA

Professor, Faculty of Education

(Bachelor of Arts)

Born in 1933

Photo : Tsutomu NAKAMURA

目 次

Contents

1. 交流企画 日本とオーストラリア95
—タスマニア一週間—
Exchange Program "Australia and Japan 1995"
—7days in Tasmania—
岩本美砂子 1
Misako IWAMOTO
2. 第47回日本衛生動物学会大会
—第24回日本医学会総会分科会—
47th Annual Meeting of the Japanese Society of Medical
Entomology and Zoology(1995)
—Satellite Meeting of 24th Japanese Society of Medicine—
鎮西康雄 3
Yasuo CHINZEI
3. 第5回国際大脳基底核会議
International Basal Ganglia Society Vth
International Triennial Meeting
中野勝磨 5
Katsuma NAKANO
4. 日米科学協力セミナー
—病原性と宿主抵抗性の分子生物学：シグナル伝達—
The 7th Japan-U.S. Scientific Seminar Hosted by Mie University
—Molecular Aspects of Pathogenicity and Host Resistance—
久能 均 7
Hitoshi KUNOH
5. 三重大大学の外国人研究者
Reports by Overseas Researchers at Mie University
マイケル・フィリップス 9
Michael PHILLIPPS
6. 留学生の目
Foreign Student's Viewpoint
バイディア・プラディーブ10
Pradeep VAIDYA
7. 第4回高度自動化機器の運動・駆動制御国際会議11
4th International Workshop on Advanced Motion Control(AMC'96-MIE)
8. 第1回アジア太平洋骨軟部腫瘍学会 (A P M S T S)11
Inaugural Meeting of the Asia-Pacific Musculoskeletal Tumor Society(APMSTS)
9. 三重大学概要12
Outline of Mie University

英文は日本文の要約です。

The English is a condensed version of the Japanese.

交流企画 日本とオーストラリア95

—タスマニア一週間—

Exchange Program "Australia and Japan 1995"

—7 days in Tasmania—

7月29日から8月5日まで、廣瀬英一人文学部長とともに、オーストラリア連邦のタスマニア大学を訪問した。オーストラリア大陸の南東の島であるタスマニアは、真冬だったが寒すぎず快適だった。タスマニア州は人口45万人、州都ホバート市は人口16万ほどで、港町で地方政治のセンターだという点で、津市に似通っている。私は、州会議事堂を見学した。

タスマニア大学は、ホバートのほかにローンセストンにもキャンパスのある、総合大学である。人文学部は、語学・文学・哲学・歴史学のほか、政治学や女性学の講座も持っているが、本学とは異なり、法学部や経済学部は別にある。但し学生はダブルメジャー制度により、法学や経済学を主専攻にしているも、人文学部に登録し受講できる。我々が現地でお世話になったのが、現代語学科日本語セクションの先生方だったが、彼女たちのところで、他学部の学生も日本語を学んでいた。

我々の訪問は、昨年本学で夏目漱石について講義されたマリア・フルーチ博士の来訪に対する答礼であり、学部間交流についての直接交渉のためであった。学部長同志の話し合いのおかげで、国際交流協定が煮詰まり、帰国後に無事締結の運びとなった。これにより双方の派遣学生は、入学科・授業料の不徴収というメリットが得られることになった。早速タスマニアから学生がやってくることになり、本学部でも派遣学生の選考を行なっている。

廣瀬学部長は、米文学者のドス・パススについてワークショップを持ち、私は「日本における女性と政治」の講演と、ワークショップ「日本の妊娠中絶：政治的観点から」を担当した。どちらも数10



タスマニア大学構内
Campus of Tasmania University

Professor Hidekazu Hirose, Dean of Faculty of Humanities and Social Sciences, and I visited Tasmania University, Hobart, Australia, from July 29th to August 5th. Although it was mid winter, the weather was very comfortable. Owing to face to face negotiation between deans, the contact agreement was concluded. Besides, Dean Hirose had a workshop on an American novelist. As for myself, I gave a lecture on "Women and Politics in Japan", and had a workshop on "Abortion in Japan: from the view-



二人の人文学部長
Deans of Faculty of Humanities and Social Sciences

point of politics". Students were very interested in the Japanese culture and politics as well as economy. We discussed a lot. Students whose major is law or economics may register and study at the Faculty of Humanities and Social Sciences, which includes the Japanese language section. It's very regrettable that we have

名の学生・教員の参加があり、私の下手な英語にもかかわらず、熱心に聴き、質問も活発だった。

講演については、日本語セクションの先生が学生に聴講を勧めてくださっており、あとで学生の感想文が送られてきた。雇用平等などをめぐって、日豪の政策過程の違いに関心を持つ学生もあったが、「どこでも女性の政治進出は困難だ」という平板な感想もあった。「家庭内暴力」について、欧米豪では「夫から妻への暴力」として、ここ20年来政治問題化しているが、日本では未だに「私事のヴェール」に隠されており、しばしば「子供のふるう暴力」を意味するというところに、聴衆が驚いていた。

ワークショップでは、日本の中絶は1948年に解禁されているが、ビルが今も未解禁だという点が、大層奇異に受け取られたようだ。オーストラリアでは、未婚・未成年でも、避妊にビルを用いることは普通である。エイズ対策としてコンドームの利用が宣伝されており、空港でも大学構内でも、トイレに自販機を見かけた。日本では望まない妊娠も珍しくなく、中絶も稀ではないということが、キリスト教倫理のベースがあるところでは、理解されがたいようだ。また、オーストラリアならば中絶でなく養子という選択も多いと質問された。これには、日本では血縁が過大に重視されており、養子はポピュラーではないと、答えておいた。なおオーストラリアでは、刑法や中絶の規制は州ごとに異なる。保守的なタスマニアでは、中絶に医学的理由と複数の医師の診断が必要だが、他の州ではもっと緩やかだと、学生が教えてくれた。倫理・文化に関わる問題だが、立法政策によって左右されるイシューなのである。

タスマニア大学の人々は、日本の経済面だけでなく、文化や政治などに多面的関心を持っている。接点となっている日本語セクションの方々の、貢献が大きい。これに対して、本学部にオーストラリア研究専門のセクションがないことが、残念だった。また、女性教員有志の努力により、最近女性学の講座が開設されている。その専任スタッフとも、最近のフェミニズム理論の動向や、オーストラリア・フェミニズムの特徴について意見を交換したが、こうした講座の存在が、うらやましいと思った。

no special section to study about Australia.

French nuclear tests at an atoll in the Pacific Ocean were announced, and movements against them were being organized. Even elementary schoolgirls and schoolboys initiated meetings. I spoke to them as a political scientist and a person whose birthplace was Hiroshima.



「日本における女性と政治」についての講義風景
Lecture on "Women and Politics in Japan"



小学校での核実験反対集会
Meeting of Schoolchildren against Nuclear Test



筆者プロフィール

岩本美砂子

人文学部助教授（法学修士）

1957年生

Profile

Misako IWAMOTO

Associate Professor, Faculty of Humanities and Social Sciences

(Master of Laws)

Born in 1957

第47回日本衛生動物学会大会

—第24回日本医学会総会分科会—

47th Annual Meeting of the Japanese Society of Medical Entomology and Zoology(1995)

—Satellite Meeting of 24th Japanese Society of Medicine—

医学会総会という出席者が3万人を超える日本でも最大規模の学会が1995年4月名古屋市で行われました。この学会は4年に一度開催され、今回は第24回ということですからその歴史もなかなかのものです。日本衛生動物学会大会はこの医学会総会の分科会の一つとして去る4月1日から3日まで三重県津市の三重県教育文化会館で開かれました。こちらの方は会員750名で今回の出席者もその三分の一というごく小さな学会で、歴史も50年少々ですがそれでも医学会の中では老舗の部類に入ります。これには全国の医学部医動物学寄生虫学教室や厚生省の予防衛生研究所・各県や市の衛生研究所等に所属する研究者が参加しています。今回の大会は三重大医学部の医動物学教室が企画運営を担当いたしました。

衛生動物学(英語で Medical Entomology and Zoology というのが最も中身にふさわしい名前として当てられています)は人間の健康に直接間接に関わる昆虫や動物を研究対象として、その形態・分類・生理・生化学・生態疫学等の基礎研究から予防・診断・治療といった応用的実地的な研究まで幅広くカバーしています。人間の健康に直接関わる動物として寄生虫がありますがこれは寄生虫学会という別の学会で扱われております。衛生動物学はその対象とする動物やその研究側面で、時代と共にその時の社会の状態を反映しながら次々と変化してきました。そして現代社会においては人々の生活スタイルや衣食住に対する嗜好や対応の仕方が多様になり、性意識の変化、医療技術の進歩、外国旅行者の著しい増加といった特徴が見られます。年間一千万人を超える人々が海外旅行をし、四百万人の外国人が来日し、世界は益々狭くなっております。この様な状況下では、衛生動物学が関与する疾病も多様で複雑になり、今までほとんど問題になら

The 47th Annual Meeting of Medical Entomology and Zoology was held on April 1-3 1995 at the Miekken Education and Culture Center Hall in Tsu City. This meeting was held as a satellite meeting to



吸血中のマラリア伝播蚊
Malarial mosquito during blood feeding

the 24th Japanese Society of Medicine which was being held in Nagoya City on the same time. Approximately 250 participants attended and about 100 papers were presented reporting on medically important insects and animals such as disease vectors, allergen insects and their taxonomy, physiology, biochemistry and ecology, as well as related clinical researches.

The mosquito borne diseases such as malaria, filariasis, dengue fever, etc. are very important particularly in tropical countries. Recently more than 10 million Japanese go abroad every year and bring back diseases from those countries. It is becoming urgent to study the tropical diseases, particularly



ライケル教授(ミシガン州立大学)による特別講演
Special lecture by Professor Raikhel (Michigan State University)

なかった病気が著しく増えたり、新しいタイプの疾病が報告されたりしています。人と昆虫や動物との接点が増えたと見ることができます。今回の衛生動物学会大会においてもこの様な状況を反映して、様々な輸入感染症（たとえば熱帯地で感染して帰国して発病する病気）や現在急激に増加の一途をたどるアレルギーや喘息、ダニ媒介性の新しい病気等とそれらの原因となる昆虫・動物に関する研究発表がたくさんありました。

しかし、時代を超え所を越えて超一級の衛生動物は蚊です。蚊の吸血によるアレルギーなどの問題もありますがより重要なのは蚊は吸血によって病気を媒介することです。蚊によって媒介される病気にはマラリア・フィラリア・デング熱・黄熱・日本脳炎を含む各種脳炎など熱帯地域を中心に蔓延し非常に大きな問題となっています。特にマラリアでは毎年2～3億人が感染発症し、約150～220万人の主に5歳未満の子供の命が奪われていると言われています（WHO推計）。マラリア撲滅のために多くの努力がなされていますが、特効薬クロロキン耐性原虫の出現・媒介蚊の殺虫剤抵抗性の出現・マラリアワクチン開発の停滞など難問ばかりです。日本では土着のマラリアは無くなりましたが、毎年患者が発生し死者もでて重要な輸入感染症の筆頭として認識されるようになってきました。この大会でも、マラリア媒介蚊の新しい防除法の研究やその基礎となる蚊の生理から生態まで様々な角度からの発表と議論が有りました。

こうした研究のすべてに基本的で重要なのは対象とする生物の本来のすがたをよく知ること、その生物学をきちんとやること、そのことを抜きにして応用研究も対策研究も成り立たないとの認識のもとにそのことを確認する機会になればと願って2つの特別講演を企画しました。ミシガン州立大学のA.Raikhel教授に蚊の生物学特に卵形成について、また、東大薬学部の名取教授に昆虫の抗菌タンパク質についてそれぞれ興味深いお話を伺うことが出来ました。いずれも現象から出発して最後はそれに介在する分子の同定・構造決定・機能の解析へと見事に展開する研究のお話は聞き応えがありました。巨大な医学会総会の中では消え入りそうな衛生動物学会でしたが、小粒ながらびりっとした、出席者一人一人の次なる研究意欲を掻き立てそれなりの満足感を持って帰って頂けるものになったとお世話をした当教室のスタッフと関係者は自負しているところです。ご協力頂いた学内外の皆様方にこの場をお借りして御礼申し上げます。

the malaria and its vector, anopheline mosquito. Concerning this topics, we had two special lectures from Professor Alex Raikhel, Michigan State University, on Molecular Biology of 'Mosquito', and Professor Shunji Natori, Tokyo University, on 'Anti-bacterial Proteins in Insects'.

We, the members of Department of Medical Zoology, were pleased to organize and take care of this compact and exciting meeting. We would like to express our thanks to all those who contributed to the meeting.



懇親会でのひとこま
Shot at the Reception



筆者プロフィール

鎮西 康雄

医学部教授（農学博士、医学博士）
1944年生

Profile

Yasuo CHINZEI

Professor, Faculty of Medicine

(Doctor of Agriculture, Doctor of Medicine)

Born in 1944

第5回 国際大脳基底核会議

International Basal Ganglia Society Vth International Triennial Meeting

第5回国際大脳基底核会議が平成7年5月23日から26日までの4日間にわたり、伊勢志摩の合歓の郷で開催されました。約150名が参加しそのうち80名が外国から参加されました。

外国人のほとんどが欧米、カナダ、オーストラリアからであり、発展途上国からの参加がみられなかったのが残念でした。本学会は1983年9月国際生理連合総会のサテライトシンポジウム（大脳基底核の構造と機能）として関係者が集まった際に、永続的な学会として創立されました。第1回のオーストラリア、次いでカナダ、イタリア、フランス、と3年毎に開催されて来ております。私もイタリア、フランスでの会議に参加して参りました、いず

れも地中海のCagliari(サルジニア島)、南仏のGiensという大変にきれいなリゾート地での開催でした。ところで、大脳基底核とは聞き慣れない方も多いと思いますが、これは大脳の皮質下(大脳の中心部近く)にある神経細胞の大きな集団です。運動とか行動を遂行するためには極めて大事な脳の場所です。この部位が障害されると、不随意運動、手の震え、筋肉の強ばりなどが生じて、うまく体が動かなくなります。パーキンソン病、舞蹈病などよく知られている病気がその一つです。この会議の目的は、世界各国から神経科学者が最新の研究成果を持ち寄り、大脳基底核の構造と機能について討議し理解を深め、その成果を公表し、脳研究の発展および運動障害を伴う病気の解明、診断治療に役立てることにあります。

6年前のイタリアの会議で、第5回国際大脳基底核会議の開催国は日本であり、会頭は群馬大学医学部脳神経外科の大江千廣教授に決定されておりました。この会議がなぜ伊勢志摩地方で開催されたかについては、

The Vth International Basal Ganglia Society Meeting was held in Nemuno-Sato (Ise-shima), Japan under the sponsorship of Professor Chihiro Ohye,



大江会頭
President Prof. Ohye

Gumma University, from 23 through 26 May, 1995. Professor Katsuma Nakano, Mie University, served as the local committee manager. One hundred-fifty scientists including 80 foreigner representing 11 different countries attended the meeting. The scientific program comprised 10 sessions of symposia and poster presentations covering all the

fields of the basal ganglia. The proceedings of this symposium will be published by Plenum Press, New York, under the title "The Basal Ganglia V, Structure and Function Current Concepts".

In 1983, a Satellite Symposium on the Structure and Function of the Basal Ganglia was held at Lorne, Australia, following the 29th International Congress of the International Union of Physiological Sciences.



食後
After Dinner

少し訳がありました。それは、フランスでの会議の会頭をされた Percheron 教授が私どもの研究室に来られた折に伊勢へ案内したところきれいな海に感動され、日本での会議は是非この地方でやって欲しいと、大江教授に話されました。大江先生は彼とは大変に親交が深くこの一言ではほぼ決定されたものと思われまます。実行委員として、当地で開催するにあたり多くの不安がありました。大変盛況のうちに幕を閉じることが出来ました。

初日は午後6時から、大江教授の司会のもとで、梶林博太郎名誉会頭のパーキンソン病にたいする脳定位手術療法と有効性についての特別講演がなされました。講演終了後、歓迎パーティーが開かれました。翌24日はシンポジウムとポスター発表が予定されており、大江会頭の開会の挨拶がなされた後、先ず不随意運動の発現機構に関するシンポジウムが開かれました。最初のセッションは Basal-Ganglia-Thalamocortical System (大脳基底核一視床皮質系) の課題で、私が司会を務め、しかも最初の speaker は私でしたので、少し緊張しました。当日は5つのセッションの発表と多数のポスター発表がなされました。会議は7時30分に終了し、その後の夕食はバーベキューで会の疲れをいやしました。アル

コールのまわったところで、二次会となり、深夜まで楽しみました。25日も同様にシンポジウムとポスター発表があり、昼食時には和食がでしたが、外国の方々には口に合わない人もいたようです。午後3時から会議は休会で、excursion が予定されており、バスを連ねて伊勢神宮に参りました。帰り際に激しい雨に見舞われ、いささか残念でしたが、これ以外本会議中は大変天候に恵まれました。最終日の26日も午前中は予定の会議があり、午後は総合討論がなされました。

今回の会議では、大脳基底核の、神経回路、ニューロン活動、情報の処理統合機構、神経伝達物質の動向と受容体の解析および各種疾患との関連、行動の学習と記憶、その他、遺伝子工学、分子生物学的研究に関するものが多く、実りの多い成果が発表されました。このシンポジウムの成果は、The Basal Ganglia (Plenum 社、New York) として、後日出版される予定です。これまでに、I~IV巻が出版されており、その内容は最新のデータを集大成したものであり、多くの研究論文に引用されております。

次回は、MIT の Graybiel 教授のもとにアメリカ合衆国で1998年に開催される予定です

Because of the success of the symposium, the participants decided to form the International Basal Ganglia Society. The purpose of the Society is to advance the understanding of the structure and functions of the basal ganglia and associated structures by bringing together neuroscientists from various countries of the world and to inform the general public of the results and implications of current research.



ドリンクコーナー
Drinking Corner



筆者プロフィール

中野 勝磨

医学部教授 (医学博士)

1936年生

Profile

Katsuma NAKANO

Professor, Faculty of Medicine

(Doctor of Medicine)

Born in 1936

日米科学協力セミナー

—病原性と宿主抵抗性の分子生物学：シグナル伝達—

The 7th Japan-U.S. Scientific Seminar Hosted by Mie University

—Molecular Aspects of Pathogenicity and Host Resistance—

日本学術振興会および米国科学財団が主催する日米科学協力セミナーが、三重大学国際交流基金の後援のもと、平成7年9月24日から29日まで津都ホテルで開催された。このセミナーは、昭和36年に当時の池田首相とケネディー大統領との合意協定からスタートした日米科学協力事業の一環である。植物の病気の分野では、病原菌がどのように病原性を発揮するのか、植物は病原菌の攻撃からいかに身を守っているのかという

根本的な問題が長い間の研究テーマになっている。この研究課題を主題とした本セミナーシリーズは、昭和41年に蒲郡で開催された第1回を皮切りに、その後ほぼ4年毎に開催されている伝統的なシリーズである。日本ではこれまでに、蒲郡の他に犬山で昭和61年に第5回が開催され、いずれも名古屋大学がホスト役を務めたが、今回は三重大学がホスト役を務めることになった。

今回は、米国側の10大学1民間企業から14名、日本側13大学から21名が参加し、22題の講演と14題のポスター発表を行なった。初日には、ミネソタ大ブッシュネル教授が、これまでのセミナーシリーズが世界の植物感染生理学研究に果たした貴重な役割について講演した。つづいて筆者が感染生理学研究に果たす細胞学的重要性について基調講演を行なった。午後から、講演と活発な討論が本格的に開始された。4日間の会議では、病原性と抵抗性相互関係の遺伝的背景や病原性糸状菌（かび）の形態形成、病原性細菌や糸状菌のシグナル認識、病原性因子、植物の抵抗性機構に関する分子生物学的研究成果などの講演があり、活発な議論が展開された。さらに、植物の抵抗性発現に果たす細胞骨格の重要な役割や植物の細胞膜、細胞壁のAT-Paseと燐酸化がシグナル伝達に果たす重要な機能などの興味ある講演が行なわれた。また、病原菌の侵入をうけた植物が合成する抗菌性物質、ファイトアレキシンの遺伝子レベル解析や細菌、糸状菌が産生する植物毒や毒素の生成機構と作用機構などの研

The Japan-U.S. Seminar entitled "Molecular Aspects of Pathogenicity and Host Resistance" was held at Tsu-Miyako Hotel on September 24-29, 1995. This seminar is a part of the scientific cooperation programs between Japan and the USA and is supported by the Japan Society for the Promotion of Science and the U.S.A. National Science Foundation. This bilateral program

started in 1961, on the agreement between Japanese Prime Minister, Hayato Ikeda, and U.S. President, John F. Kennedy. The first conference of this seminar series was held in Gamagohori in 1966. Since then, 5 more conferences were held in either country every 4-5 years. At the end of the 6th conference, Mie University was nominated as a host university for the next conference.

In this seminar, 14 U.S. and 21 Japanese scientists participated and presented 22 oral and 14 poster papers. The presentations were concerned with not only molecular aspects of pathogen-plant interactions but also a rather broad area including genetics and the physiological background of the interactions.



開会式
Opening Ceremony



熱心な討議
Heated Discussion

究成果も披露された。

初日の夕刻から、学長、生物資源学部長、事務局長をはじめ3名の事務官が出席されて三重大学学長主催歓迎晩餐会が盛大に開催された。武村学長の歓迎の辞につづき、米国側代表のミルス教授が謝辞を述べ、高橋生物資源学部長の乾杯の音頭で立食パーティーが始

まり、豪華な食事を楽しみながら三重大学関係者と日米の参加者がなごやかに歓談した。

中日の3日目には、二見が浦、鳥羽の真珠島、伊勢神宮にバスで出かけ、友好を深めるとともに秋の一日を散策で楽しんだ。真珠博物館では養殖技術に興味を示し、科学者らしい質問続出で案内嬢の目を白黒させていたが、真珠売り場の値札をみて今度は自分が目を白黒させていたのは印象的であった。

最終日5日目の午前中には、会場のパネルに展示された14題のポスターを前に、口頭発表ではカバーできなかった最近の研究成果について活発な議論が展開された。午後、今回のセミナーの成果と今後の研究方向などをとりまとめる討論が行なわれ、成功裡のうちに全日程を滞りなく終了した。

2日目、4日目には、米国側、日本側主催の晩餐会が行なわれ、カラオケを楽しみながら友好を深めた。カラオケでは日本側の芸達者が米国を圧倒し、日本では特殊な音楽教育をしているのかと質問されるほどであった。

最終日には生物資源学部を表敬訪問した米国側参加者が研究室の設備充実を目を見張り、昭和の時代の設備と比べると隔世の感があると印象を語ってくれた。

第1、2回のセミナーでは、日本の研究レベルは米国に大きくリードされていたが、最近では日本側の独創的な研究発表が多くなり、我が国が欧米の感染生理研究と肩を並べてきたという印象が強い。これはこのセミナーシリーズをきっかけに多くの共同研究、研究者交流が行なわれてきたことに負うところが大きい。このような国際セミナーは、研究能力を高めるばかりではなく、相互理解を深めることによって友情の輪、人の輪を広げる意味で計り知れない意義があると痛感している。三重大学が今後ますます国際的な役割を積極的に果たすことを願ってやまない。



ポスターを前に討議する参加者
A hot discussion at the poster session

The welcome banquet, hosted by the President of Mie University, was held in the evening of 25th. The President, the Dean of Faculty of Bioresources, the Director of Administration Bureau and 3 other administration staffs attended and gave a warm welcome to the participants.

This seminar successfully promoted the understanding of the infection mechanism in fungal and bacterial diseases. It also contributed to the deepening of the mutual friendship among the participants. All the participants acknowledge the financial aid from Mie University International Exchange Fund and the warm hospitality given by the University and the Faculty of Bioresources.



学長主催晩餐会で歓迎の辞を述べる武村学長
A welcome address by President Takemura at the President Banquet



筆者プロフィール

久能 均

生物資源学部教授(Ph.D., 農学博士)
1940年生

Profile

Hitoshi KUNOH

Professor, Faculty of Bioresources
(Ph.D., Doctor of Agriculture)

Born in 1940

日本での日々

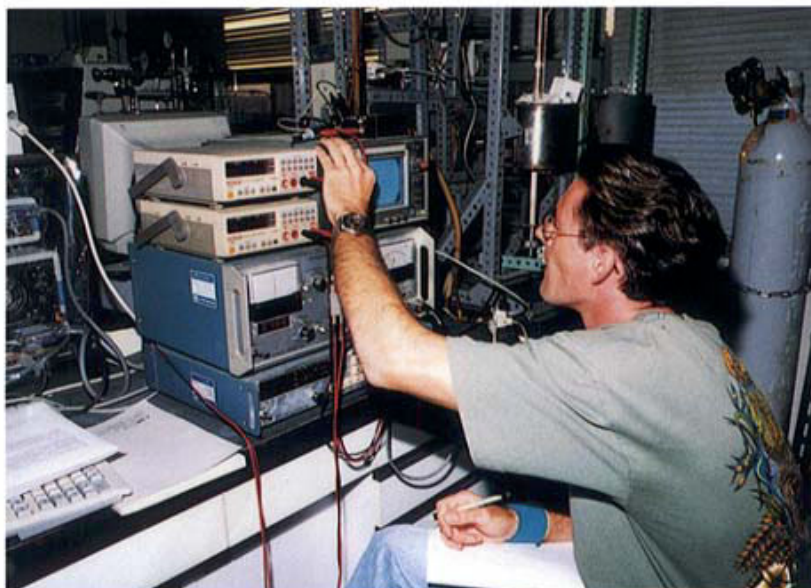
私の名前はマイケル・フィリップスです。ニュージーランドのワイカト大学、材料科学コースの博士課程の学生です。高温型の固体電解質燃料電池についてが私のテーマですが、特に高温でこの電池を作動させる際の、酸化物電極の研究がメインです。2年前、燃料電池での分野では世界的な権威である、工学部の山本教授が私たちの研究室を訪問しました。その折、私に三重の研究室に来ないかと声をかけてくれたのです。

昨年、6ヶ月間三重大学に滞在しました。そして今年4月、研究をさらに続けるために再来日しました。ここでの研究はとても実り多いものでした。すべての装置が、

ニュージーランドの研究室とは比べものにならないくらい充実しています。多くが自動化されていて、そのあいた時間を他の仕事(訳者注:女の子とのデート?)に回すことが出来るととても有益でした。特に、X線回折装置と周辺のソフトの充実が素晴らしいものでした。物質の熱

膨張と電気化学的な測定の様子もマスターしました。電気化学的な方法で電極の特性を見る装置をニュージーランドで組み立てつつあるので、三重大学での実験は私にはとても役に立ったのです。

ここで過ごした日々は、私には夢のような楽しいものです。日本に着いたその瞬間から、誰もが心から歓迎してくれました。研究室の学生達と一緒に山に行ったりスポーツを楽しんだりしました。何か問題があればすぐ助けてくれました。日本で研究する機会が持てて、とてもうれしく思っています。山本教授と研究室のスタッフ、学生の皆さんに感謝します。日本で過ごした日々は、私の人間としての成長と、学問的深まりにもっとも有益な時でした。



私の実験風景：三重大学工学部分子素材工学科エネルギー変換化学研究室で
In the laboratory of energy conversion chemistry, Faculty of Engineering

My Time in Japan

My name is Michael Phillipps and I am in the second year of my Ph. D. course in Material Science at the University of Waikato in New Zealand. I am researching in the area of Solid Oxide Fuel Cells, specifically high temperature oxide electrodes for use in these systems. I have studied for 6 months last year here at Mie University in the Yamamoto Energy Conversion Laboratory. I came again in April of this year to continue my research and will soon be returning to New Zealand. I am very grateful for the opportunity to research in Japan, and I am indebted

to Prof.

Yamamoto and the working staff and students of the Yamamoto Laboratory. The time I have spent in Japan has been most beneficial for my own knowledge and growth as a person.



筆者プロフィール

マイケル・フィリップス
ニュージーランドワイカト大学
大学院博士課程2年生
1967年生

Profile

Michael PHILLIPPS

The second year of Ph.D.course in Material Science at the University of Waikato in New Zealand

Born in 1967

三重大学における学習体験

多くの留学生により、今まで学内の刊行誌に彼らの国や文化について沢山紹介されてきました。人々が理解しあうために違った国の種々の文化を知ることは大切なことだと私も思いますが、外国人留学生の留学の目的は、専門分野についての研究であると思いますので、私は日本で受けた教育と私の研究について書いてみたいと思います。

私は医学部を卒業後ネパールの大学病院で3年間働き、日本で学位(医学博士)を取得するため留学しました。6ヶ月間は名古屋大学で語学研修を行い、その後三重大学医学部第一外科へ参りました。最初の2年間は、第一外科の病棟で臨床修練を行ないました。初めは言葉やシステムの違いで苦労しましたが第一外科の先生方が親切に指導して下さい、わからないことは何でも教えて下さいました。外国人医師の臨床修練許可証を受けてからは、日常の診療の他、多くの手術に入ることができました。そして約2年間で私は第一外科の専門分野である肝胆膵の大きな手術の手術手技を学びました。

その後、博士課程の研究をするため病理学教室にお世話になりました。私のテーマは、「乳頭部周囲癌の遺伝子的相違」でした。病理学教室の先生方の適切なご指導と数多くの討論により、私は約1年半で研究を終えることができました。また幸運にも私の主論文が著名な雑誌に掲載されることになり、博士課程を修了する予定となりました。

私はまた国内外を問わず多くの大きな学会で発表する機会に恵まれ、イタリアやアメリカにも出張しました。また論文を3編と5編以上の共著論文を書き、すべて有名な雑誌に掲載されています。

私は三重大学で単に知識を得たというだけでなく、多くの事を学びました。そして、日本語や日本のシステムがわからないために疎外されることなく周囲にとけこめたことは、私にとってとても幸せでした。

最後になりますが、第一外科の水本龍二名誉教授、川原田嘉文教授、病理学の坂倉照好教授、矢谷隆一教授、第一外科と病理学教室の先生方がいらっしゃるからこそこのようなすばらしい経験をすることはできなかったと思います。皆様に心からお礼を申し上げます。

Educational Experience in Mie University

After joining Ph. D. course in the First Department of Surgery, I worked in the clinical ward, learning patient care and operative techniques of, especially hepato-biliary-pancreatic cancers. Then, I went to



JDDW会議において、第一外科の先生方と共に
At JDDW 1995 conference with doctors of First Department of surgery

Department of Pathology for research on "Genetic differences between the periampullary carcinomas".

Within my 4 years, I completed my research, presented papers in many important conferences, wrote three papers and co-authored 5 more. My accomplishments may be little compared to my colleagues, but the important thing for me was what I learned.

I would never have had such a wonderful and educational experience, if not for all the staffs of my department, to whom I express my deepest gratitude.



筆者プロフィール
バイディア・プラディーブ
大学院医学研究科博士課程4年生
(ネパールより留学)
1964年生

Profile

Pradeep VAIDYA

Senior Student of Doctor Course, Mie University School of Medicine
(from Nepal)
Born in 1964

第4回高度自動化機器の運動・駆動制御国際会議
4th International Workshop on Advanced Motion Control(AMC'96-MIE)

日時：

1996年3月18日～1996年3月21日

場所：

三重大学
三重県津市上浜町1515

講演者：

アメリカ、ヨーロッパ、アジア等 外国人約50名、
日本人約150名

参加費：30,000円

代表者：

三重大学工学部電気電子工学科教授 堀 孝正

問い合わせ先：

〒514 津市上浜町1515
三重大学工学部電気電子工学科

電話：0592-32-1211 内線3850 Fax：0592-31-9442

Date：

18th March 1996～21th March 1996

Venue：

Mie Univ.
1515 Kamihama-cho, Tsu-shi, Mie-ken

Presentators：

About 50 from America, Europe, Asia, etc. and
about 150 from Japan

Open to the Public：30,000yen

Coordinator：

Takamasa Hori
Professor, Dept. of Electrical and Electronic Eng.,
Faculty of Eng, Mie Univ.

Office：

1515 Kamihama-cho, Tsu-shi, 514 Mie-ken
Dept. of Electrical and Electronic Eng.,
Faculty of Eng., Mie Univ.

Phone 0592-32-1211 ext.3850 Fax 0592-31-9442

第1回アジア太平洋骨軟部腫瘍学会
(APMSTS)

会期：平成7年7月13、14日

開催地：東京京王プラザホテル

本学会は国内の主要な骨軟部腫瘍研究者と海外の整形外科学会を代表する研究者による2年半に亘る企画の結実であった。

13ヶ国より200人を超える一線の研究者が7月13、14日の両日東京に一堂に会した。会期の2日間に5つの特別講演、61の一般講演、また33の展示発表が行われ、また、骨軟部腫瘍治療の多岐にわたるテーマに関して語り尽くせないほどの熱のこもった多くのディスカッションがなされた。

多くの参加者が本学会の最良の門出を祝ったが、同時に開催第2日目に届いた萩原教授の他界のニュースを悲しんだ。

Inaugural Meeting of the Asia-Pacific
Musculoskeletal Tumor Society(APMSTS)

July 13-14, 1995

Venue：Keio Plaza Intercontinental Hotel, Tokyo

This meeting was the culmination of two and half years of planning by colleagues within Japan and representatives of orthopaedic associations overseas.

More than 200 experts from thirteen countries gathered to hold 5 lectures, 61 oral and 33 poster presentations and countless discussions on musculoskeletal tumor treatment.

This was an excellent start to what is hoped will be an enduring endeavor. There was sadness at the news of Professor Ogihara's death on the second day of the meeting. Although he had not been able to attend, his presence was felt throughout the conference, physically.

大学概要



- 所在地
〒514 三重県津市上浜町1515 ☎0592-32-1211
- 学部、学科 [入学定員]
人文学部 [295]
文化学科 [95] : 社会科学科 [200]
教育学部 [330]
小学校教員養成課程 [160] : 中学校教員養成課程 [70]
養護学校教員養成課程 [20] : 幼稚園教員養成課程 [20]
情報教育課程 [60]
医学部 [100]
医学科 [100]
工学部 [410]
機械工学科 [105] : 電気電子工学科 [110] : 分子素材工学科 [110]
建築学科 [45] : 情報工学科 [40]
生物資源学部 [306]
生物資源学科 [306]
計 [1,441]
- 研究科 [入学定員]
人文社会科学研究科 [10]
教育学研究科 [37]
医学研究科 [60]
工学研究科博士前期課程 [76]
博士後期課程 [12]
生物資源学研究科博士前期課程 [88]
博士後期課程 [12]
計 [295]
- 専攻科 [入学定員]
特殊教育特別専攻科 [30]
- 別科 [入学定員]
農業別科 [30]
- 医療技術短期大学部 [入学定員]
看護学科 [80]
- 職員定員
1,816人
- 外国人留学生数 (19ヶ国)
218人
- 総土地面積
5,473,489㎡

Outline of Mie University

- Location
1515 Kamihama-cho, Tsu-shi, Mie 514, Japan
- Faculties, Departments, Courses [Capacity of Admission]
Faculty of Humanities and Social Sciences [295]
Humanities [95] : Social Sciences [200]
Faculty of Education [330]
Training Course for Primary School Teachers [160] : Training Course for Junior High School Teachers [70] : Training Course for Handicapped Children's School Teachers [20] : Training Course for Kindergarten Teachers [20] : Course for Informative Education [60]
Faculty of medicine [100]
Medicine [100]
Faculty of Engineering [410]
Mechanical Engineering [105] : Electrical and Electronic Engineering [110] : Chemistry for Materials [110] : Architecture [45] : Information Engineering [40]
Faculty of Bioresources [306]
Bioresources [306]
Total [1,441]
- Research Divisions [Capacity of Admission]
Graduate School of Humanities and Social Sciences [10]
Graduate School of Education [37]
Graduate School of Medicine [60]
Graduate School of Engineering Master's Program [76]
Doctor's Program [12]
Graduate School of Bioresources Master's Program [88]
Doctor's Program [12]
Total [295]
- Graduate Course [Capacity of Admission]
Graduate Course of Special Education (Majoring in Education for the Mentally Retarded) [30]
- Special Course [Capacity of Admission]
Special Course of Agriculture [30]
- College of Medical Sciences [Capacity of Admission]
Nursing [80]
- Number of Faculty and Staff
1,816
- Number of Foreign Students (19 Countries)
218
- Total Land Area
5,473,489㎡ (= 1,353 acres)



平成7年12月

編集発行

三重大学広報委員会

委員長 藤原 和好

委員 久慈 利武 織田 揮準

” 川原田嘉文 玉置 維昭

” 上野 隆二